当時は、クッキングハウスさんがこの場所で昼間ランチをやっていて、17時からみさと屋さんが飲み屋を開店。月に1回程度集まっていた

調布で生まれた福祉の連携スタイル

連絡会ができるまでストーリー

1992年2月に連絡会ができてから今年で24年が経ちます。その誕生から今の歩みをキーマン5人の対談でご紹介します。

すべては5人の熱い思いからはじまった

飯田　調布市福祉作業所等連絡会が生まれたそもそものきっかけは、実はここ「みさと屋　野菜食堂」さん（※布田2丁目にある無農薬野菜販売&料理の店）に私と、朝日さんと若林さん、朝香さん、都立調布福祉作業所（現・旭出調布福祉作業所）の戸室さんが仕事が終わったあと、夜な夜な集まって議論を交わしていたのがはじまりです。

朝香　そう。連絡会が発足したのが1992年で24年前だから、さらにその3～4年前のことです。

朝日　当時はまだ福祉作業所が数えるほどしかありませんでした。NPO法人「調布心身障害児・者親の会」の活動で「あゆみ学園」という就学前の通園施設が74年にできて、ちょうどその子たちの卒後のことが議論されはじめた頃でした。

飯田　現在、調布市社会福祉協議会が運営する「希望の家」ができたのが82年。その分場が89年頃にできました。朝香さんが同じ82年に「ふみ月の会」を立ち上げて療育的な活動を開始され、88年に若林さんが精神障がい者支援の「くすのき会」を立ち上げられました。まだ横のつながりもなく、孤軍奮闘されている頃で、亀田さんの「調布を耕す会」もまだなかった。

朝日　昼間は現場を走り回ってくたくたになって、夜に集まってはお酒を飲みながら、調布の福祉の未来を語り合っていました。ストレスもあったし、このメンバーと語り合うことが唯一というとオーバーだけど、救いだった（笑）。

朝香　オーバーな（笑）！

朝日　それぞれ別の福祉の現場にいても、月に1回ぐらい集まって情報交換できる場があるといいね、横につながれるといいねと夢を語っていました。

飯田　市内の作業所は都立や市立もあれば、民間も頑張って増えてきた。補助金や家賃助成をもらっているところ、市との繋がり方もバラバラでした。それでも、夢を実現させるべく、まずは一歩ということで、障がいの枠を越えて、広く繋がりを求めて連絡会が立ち上がりました。

若林　活動していく中で、大きな転機だったのは、当時先駆的な取り組みをしていた足立区の視察だったと思います。足立区は人口でいうと調布の約3倍。福祉も先進的で、当時大きな社会福祉法人が中心となって福祉法人のネットワークを作り、作業の共同受注をやっていました。すでに商店街の中に福祉ショップも持っていて、自分たちでクッキーやパンなどを作り販売していました。これには本当に驚かされて、大いに刺激を受けました。

飯田　本当にびっくりしました。うらやましかった。ここまで差があるのか、私たちにもできるのかと。

朝香　あれで一気に連携を強くしようという機運が高まりました。

調布にも作業所がつながる場を、共同受注できる仕組みを

飯田　最初に取り組んだのは共同受注でした。調布市から仕事を出してもらうために何度もかけあって、最初は、公園清掃を受注しました。連絡会で受けて、希望する加盟作業所に割り振ってきました。

亀田　99年には牛乳パック回収をしていた作業所がクリーンセンターから「ごみカレンダー」のポスティングを受託しました。現在、10作業所で協力して市内の半分、約5万8000世帯に配布しています。01年には、当時の公共施設管理公社（現・調布市市民サービス公社）から「図書館」「施設」「都庁」の3つのメール便事業も受託しました。例えば「図書館メール」は、中央図書館と各分館の間を1日2回巡回し、取り寄せや貸出や返却で移動した本を元に戻す仕事です。人口22万人以上の調布市ではこうした図書館間の本の移動が1日数千冊あります。

朝日　もちろんそれまでにも、榮太樓總本舗の和菓子の箱づめや、小学館のこども向け月刊雑誌の付録の封入作業をいくつかの作業所が連携して行ったり、消費者団体連合会の発注による牛乳パックの回収での連携など小さな共同受注はありました。

若林　でも、連絡会で受託して、色々な課題を解決しながら全体で取り組むところがポイント。「1作業所」の問題ではなく、いくつもの作業所が連携して「面」となって福祉の現場が向上していく。調布の福祉全体をどう盛り上げていくかが重要。ここにいる人たちには、そういう思いが最初からありました。

自主製品の販売にも注力。共同販売も実施

飯田　わりと早くから共同販売の取り組みも行ってきました。亀田さんのところは組み紐や陶芸、クッキーなどを作っていますが、その他、ミニブーケや花かご、革製品、織物、キャンドル、石鹸、便箋などの自主製品を作っている作業所も多くあります。社会福祉協議会と掛け合って、福祉まつりで自主製品を販売する形を作りました。2日間の福祉まつりで、今では初日の土曜日は福祉作業所が自主製品を売るスタイルが定着しました。

朝日　調布クレストンホテルが年1回、100円カレーを限定200食提供する人気のチャリティーイベント「クレストンホテルカレーフェア&福祉作業所販売会」も18年になりました。

飯田　パルコの正面玄関横での販売会ももう20年になりますね。当時のパルコの部長さんと店長さんが理解ある方で「出店はOK。でも厳しいですよ」と許可してくれました。

若林　本当に厳しかった（笑）。商品の品質から包装の仕方、販売するときの服装や姿勢、マナーまで問われました。多くの団体が販売のイロハをパルコさんに学んだようなものです（笑）。そういう意味では、まわりの多くの人の思いや応援があって、連絡会が発展してこれたんだと思いますね。

飯田　今だから言えますが、市の職員の中にも要所要所で立場を越えて動いてくれた人がいました。

朝香　その流れでいえば、忘れられないことが一つあります。十数年前ですが、市長と連絡会が直接懇談する機会をつくっていただけないかお願いをしたことがありました。確信はありませんでしたが、快く受けとめていただく↖

右から
- 社会福祉法人「調布を耕す会・しごと場大好き」施設長の亀田良一郎さん
- NPO法人「ふみ月の会」ふみ月チャレンジ染地・ふみ月チャレンジ多摩川 施設長の朝香ちよみさん
- 社会福祉法人「くすのき会」事務局長の若林眞利子さん
- 社会福祉法人「調布市社会福祉協議会」地域福祉推進課長の飯田真喜子さん
- 社会福祉法人「調布市社会福祉協議会・希望の家」施設長の朝日敏幸さん